【講義８】表紙の文様について

齋藤　真麻理

一、はじめに

この講義では、古典籍の表紙にほどこされた文様について、名称や命名の由来など基礎的な知識を身につけるとともに、それが古典籍研究にとってどのような意義を有するのか、考えてみたい。

表紙とは、「書物の保護や装飾のため、書物の外側に添えられる」ものである（『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、1999 年「表紙」の項）。そのような機能性に加え、表紙はそれぞれの書物の時代やジャンル、作品内容とも関係している場合が少なくない。

一例を挙げるならば、嘉永２年（1849）刊『平家物語図会（ずえ）』の表紙には、「笹竜胆（ささりんどう）に浮線蝶（ふせんちょう）散らし」が用いられている（https://www.doi.org/10.20730/200007493）。

周知のとおり、源氏の紋は「笹竜胆」、平氏の紋は「揚羽蝶（あげはちょう）」である。つまり、『平家物語図会』の表紙は、源平合戦を連想させる文様で飾られているのであり、表紙が作品内容を物語る趣向となっているのである。

このように、表紙の文様や色、素材まで含めて観察し、理解することで、その書物の内容や文化史的意義をより深く理解することができる。

二、表紙のさまざま

表紙には、大別して「裂（きれ）表紙」と「紙表紙」がある。

「裂表紙」には麻、錦、緞子（どんす）布などが用いられており、実用より装飾性が重視されているといえよう。豪華な絵巻などには金襴（きんらん）緞子表紙が多いが、版本については、献上目的等の上製本以外、裂表紙を使用した例はきわめて少ない。

これに対して、最も多く見られるのが紙表紙である。以下にその代表的な例をあげよう。

・素紙表紙。料紙と同素材の表紙で、共紙表紙ともいう。
・香表紙。丁字で染色した表紙で、薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前から多用されている。
・渋引き表紙。柿渋を引いた栗色の表紙で、栗皮表紙とも呼ばれる。何度も渋を重ね、光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。
・紺紙金泥表紙。藍で紺に染めた紙に、金銀の泥で下絵を描いた表紙。「紺紙金泥」とは紺色の紙に金泥で書いたものをさす用語で、経文や仏画に作例が多い。典型的な例として、平安時代の装飾経を挙げることができる。これは紺や紫の染紙に金銀泥を用いて経文を書写したもので、見返しに経典の内容を示す経絵を描く例も多い。文学においては、物語や歌書に紺色金泥表紙が散見する。金銀の切箔や野毛、砂子を紺紙にまき、草花や遠山、霞など、その書物とは無関係な風物を描く例が比較的多いが、作品内容を踏まえた絵画表現も見られる。
・丹表紙。鮮やかな赤橙色の表紙であるが、水銀を用いているために酸化が進み、鉄色や銀色に変色したものもある。表紙は経年により変色する場合が殆どであるから、もとの色を留めている部分を確認する必要がある。
・刷付け表紙。表紙全体に錦絵を印刷した表紙。合巻などに見られる。

三、文様を表す技法

表紙に文様を表現する技法としては、上述のとおり、手描きや印刷によったものがあるが、そのほかにもよく用いられた代表的な技法が二種ある。

第一は、艶出し文様である。凹凸の型を表紙の裏面に当て、表面から磨くなどして光沢を出すという技法であり、江戸時代初・中期に多く用いられたとされる。

艶出し文様は、表紙のオモテ上は凹凸が目立たない。従って、経年劣化した表紙の場合、オモテを一見するだけでは文様がないように見えてしまう。しかし、光線の加減で文様の有無や意匠を判別できる場合があるので、無地表紙と即断せず、注意して観察したい。見返しが剥がれているなど、表紙ウラが露出している部分があれば文様が確認しやすい。是非、表紙ウラにも注目して頂きたい。

第二は、空(から)押し文様である。型を用い、表紙の表面に押しつけて凹凸を浮き出させる技法である。慶長年間（1596～1615）以後に多く見られ、朝鮮本の影響の可能性を指摘する説もある。

明治本にも空押し文様は多く見られるが、明治本の場合はしばしば光沢を伴っている。つまり、艶出しの型押し表紙になっているのであるが、これは西洋の革表紙を意識した意匠であったのかも知れない。

「古典籍」と「近代文献」。両者は一見、距離があるように見える。しかし、実は繋がっている。表紙文様は、そのことを改めて考えさせてくれる興味深い素材といえよう。

四、表紙の呼称

「三、文様を表す技法」で示した文様は、単一の文様から成る場合と、複数の文様の組み合わせから成る場合があり、文様の配置の仕方にも一定の型がある。それらの呼称について簡単に示しておく。

第一、「地」「繋(つな)ぎ」。この呼称は、単一の文様が連続してほどこされている場合に用いられる。たとえば、四角い渦巻き状の文様である「雷文(らいもん)」は、よく用いられる文様のひとつであるが、これが表紙の面全体に連続性をもって配されている場合、「雷文地」「雷文繋ぎ」などと呼ばれる。

第二、「◇◇地に◆◆文様」「◇◇繋ぎ地に◆◆文様」。これは、地文様◇◇に別の文様◆◆を取り合わせている場合に用いられる。たとえば、「雷文」を連ねた地文様の上に「唐草(からくさ)文様」が配されていれば、「雷文繋ぎ地に唐草文様」と称する。このように文様を組み合わせた表紙は多く見られる。

第三、文様が一定の間隔をおいて配されている場合。これは「地」「繋ぎ」ではなく、「散らし」という呼称を用いる。たとえば、「二葉葵(ふたばあおい)」の文様が散らしてあれば、「二葉葵散らし」などと呼ぶ。

このほかによく出てくる文様には、「何々の丸」と称する文様がある。これは円の中、または、円形に動植物などが描かれている文様であり、たとえば、「龍の丸」、「鶴の丸」などと呼ぶ。また、刷毛(はけ)ではいたような線状の文様は「刷毛目文様」と

総称され、線が横であれば「横刷毛目」、縦であれば「縦刷毛目」といったバリエーションで呼ばれる。

五、表紙文様の楽しみ

古典籍の表紙には、四季の景物や動植物、器物、文字、幾何学文様など、さまざまな意匠が凝らされている。吉祥性や季節感を兼ね備え、古くから調度品等々に用いられた文様がある一方、それと気づかないかたちで、現代の私たちの日常生活の中に溶け込んでいる文様もある。

ひとつひとつの文様の出自を尋ねてみると、その豊かな文化的背景が見えてくる。それを知ることによって、古典籍に新たな奥深さを感じることができるのではないだろうか。

参考文献

本資料で使用した用語には呼称に揺れがあるが、原則として『日本古典籍書誌学大辞典』に拠った。また、表紙の色に関して若干の参考文献を挙げた。色見本はWEB上にも散見するが、PC等の環境により全く異なる色調に見えるため、注意を要する。そもそも、古典籍の表紙（和紙や絹）の色と、光沢紙に再現された色とでは明度や色調に違いを感じる場合が少なくない。自分が使いやすい色見本を決め、それに拠ってできる限り均質な書誌データを採ることを勧めたい。

・『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999年
・国文研文献資料部『調査研究報告』25号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、2004年。国文研HPからも公開中）
・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006年
・『日本の伝統色』大日本インキ化学
・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研HP
・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968年

令和１(2019)年度
日本古典籍講習会

表紙の文様について

国文学研究資料館　齋藤真麻理

2019年7月3日

表紙文様について

Ⅰ　表紙とは

Ⅱ　表紙文様の基礎知識―艶出しと空（から）押し―

Ⅲ　文様のさまざま

Ⅳ　文様レッスン①～⑥

※とくに注記のない古典籍は国文研蔵

Ⅰ 表紙とは

表紙

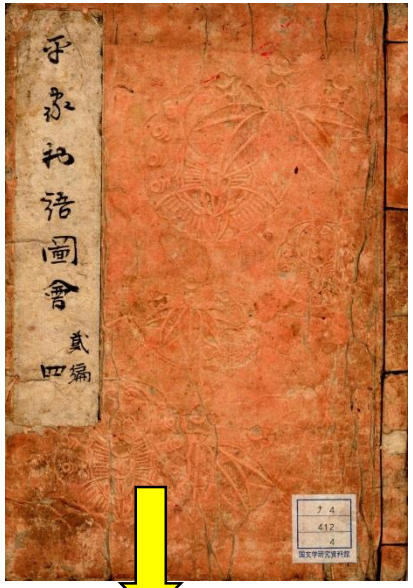
書物の保護や装飾のため、書物の外側に添えられる。

・巻子（かんす）装の一枚物／冊子装の二枚物

・布表紙（裂（きれ）表紙）／紙表紙

※嘉永二年刊『平家物語図会』

https://www.doi.org/10.20730/200007493

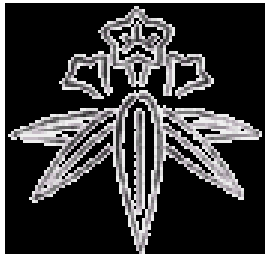


文様拡大・モノクロ

表紙文様＝笹竜胆（ささりんどう）に浮線蝶（ふせんちょう）散らし

源氏の紋は「笹竜胆」、平氏の紋は「蝶」であるという理解が定着し、源平合戦を連想させる表紙文様へ。

浮線蝶



鎌倉市の市章

書物の時代、ジャンル、内容などにも関わる

表紙の世界／デザインの美しさ

◆布表紙（裂表紙）

麻、錦、緞子（どんす）など布を用いる。実用より装飾性を重視。豪華な絵巻などは金襴緞子（きんらんどんす）が多い。版本については、献上目的等の上製本以外、きわめて少ない。

◆紙表紙

素紙（そし）表紙＝料紙と同素材の表紙。共紙（ともがみ）表紙。

香（こう）表紙＝丁字（ちょうじ）で染色。薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前にも多用。

渋引き表紙＝柿渋を引いた栗色。栗皮表紙。何度も渋を重ね、光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。

紺紙金泥表紙＝藍で紺に染めた紙に金銀の泥（でい）で下絵を描いたもの。物語や歌書に多い。

丹（たん）表紙＝鮮やかな赤橙色。水銀を用いるため酸化が進み、鉄色や銀色に変色するものもある。

刷付（すりつ）け表紙＝合巻などの表紙全体に錦絵を印刷。

・『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、１９９９
・『日本の伝統色　その色名と色調』長沢盛輝、青幻舎、２００６
・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研リポジトリに掲載

布表紙

①『大黒舞』
江戸時代前期写　絵巻2軸　貴重書
書誌ID：200006198
https://www.doi.org/10.20730/200006198
縹色地に唐草文様金襴表紙
（はなだいろ）

紙表紙

②『太平記』
寛永元年刊 古活字版　41冊　貴重書
書誌ID：200003071
https://www.doi.org/10.20730/200003071
渋引き表紙（栗皮表紙）

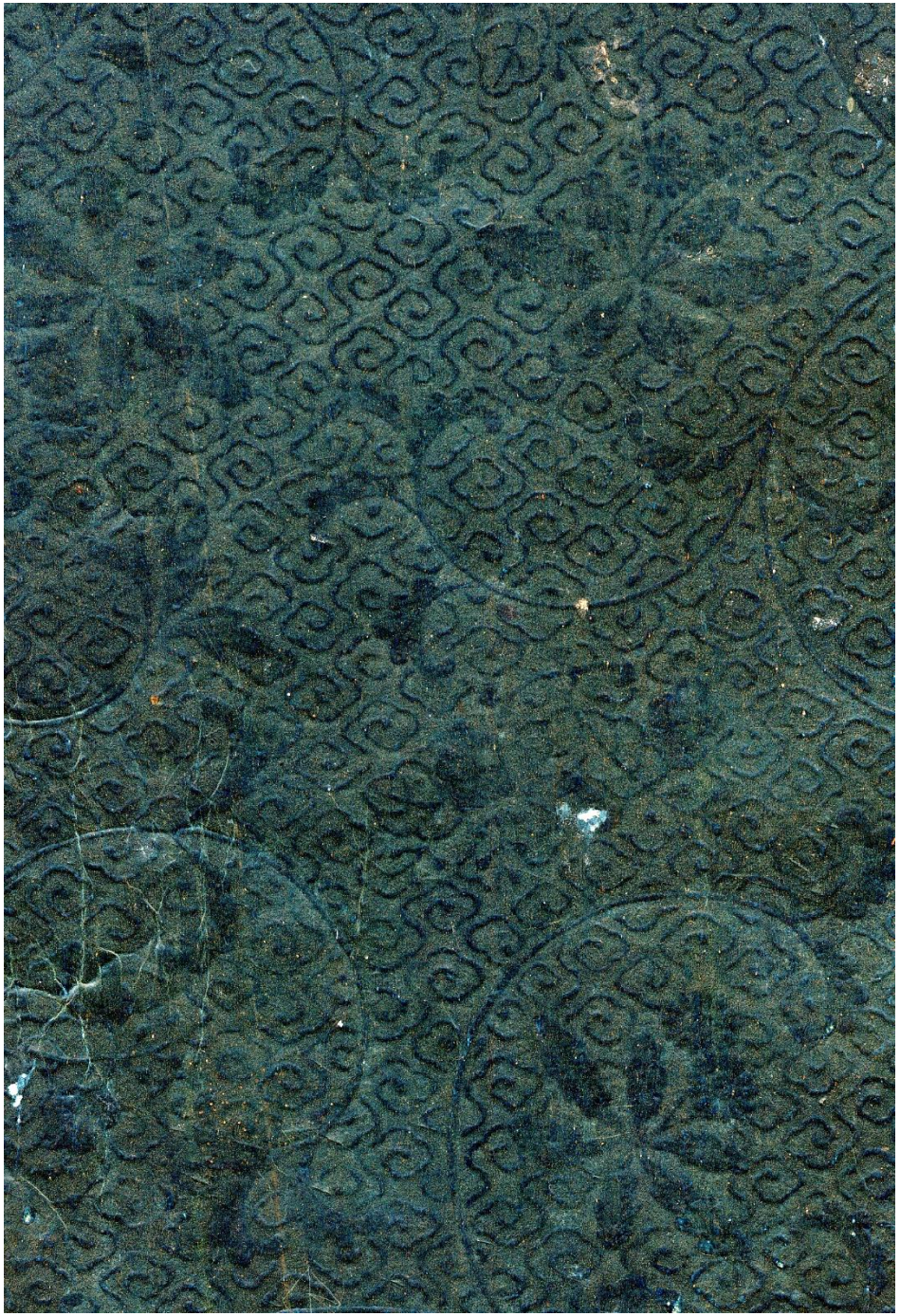
③『古今口伝秘抄』
室町時代初期写　1冊
書誌ID：200000091
https://www.doi.org/10.20730/200000091
紺紙金泥表紙

④『ささやき竹』
江戸時代前期写　3冊
書誌ID：200003084
https://www.doi.org/10.20730/200003084
紺紙金泥表紙

⑤『伊曽保物語』
万治2年刊　1冊
書誌ID：200021086
https://www.doi.org/10.20730/200021086
丹表紙

第廿七　からすとくじやくとの事

じらいやごうけつものがたり
⑥『児雷也豪傑譚』
合巻　48冊
書誌ID：200004250
https://www.doi.org/10.20730/200004250
刷付け表紙



寛政９年刊『詩仙堂志』
個人蔵。

・明治本『観音経和談鈔』
『弁財天利益和談鈔』と
同一の表紙文様。

・文様名
「雲文繋ぎに春の七草」

元禄3年（1690）刊『人倫訓蒙図彙』巻六より「表紙屋」

https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013050

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

Ⅱ 表紙文様の基礎知識
―艶出しと空押し―

艶出し文様

凹凸の型を紙の裏面に当て、表面から磨くなどして、光沢を出した文様。江戸時代初期・中期に多いとされる。経年劣化などにより、一見、文様がないように見えても、光線の加減で判別できる場合がある。見返しが剥がれて露出した裏面に注目。

空押し文様

型（から）を用い、表面に押しつけて凹凸を浮き出させた文様。慶長年間（一五九六～一六一五）以後に多く、朝鮮本の影響かとする説もある。明治本にも多く見られる。

文様の主な配置

①単一の文様のみ

②地模様＋別の文様

③文様を散らす

※いずれも呼称は一定していないが、ここでは『日本古典籍書誌学辞典』による。

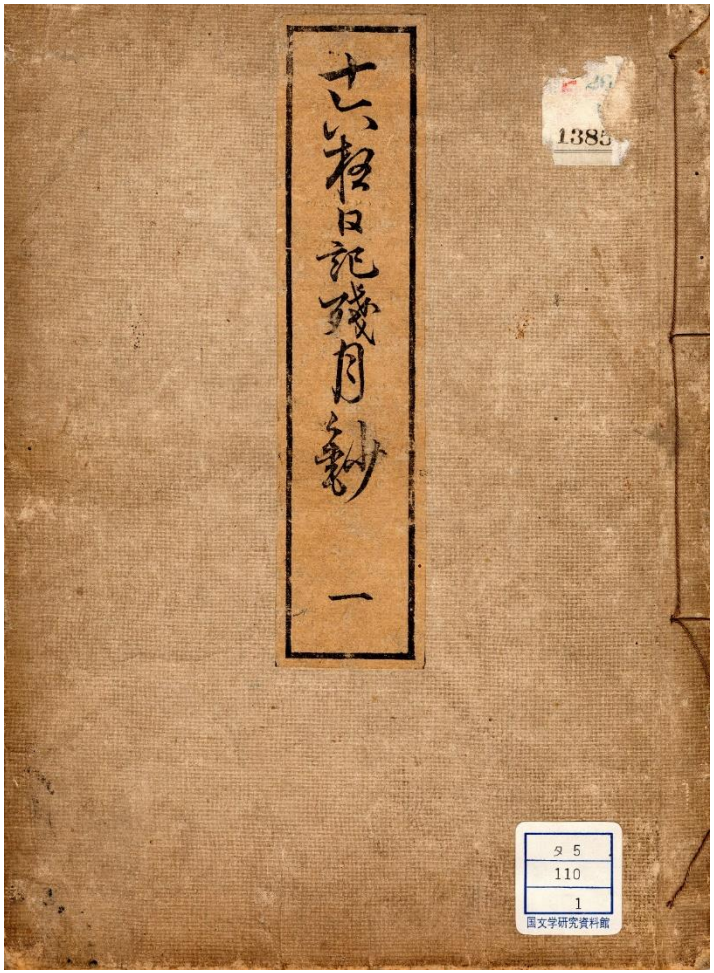
※国文研文献資料部『調査研究報告』１・２・４・５・６・12・13・14号および同25号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、２００４年。国文研HPからも公開中）参照。

Ⅲ 文様のさまざま

地文様・幾何学文様

①布目

（部分拡大）

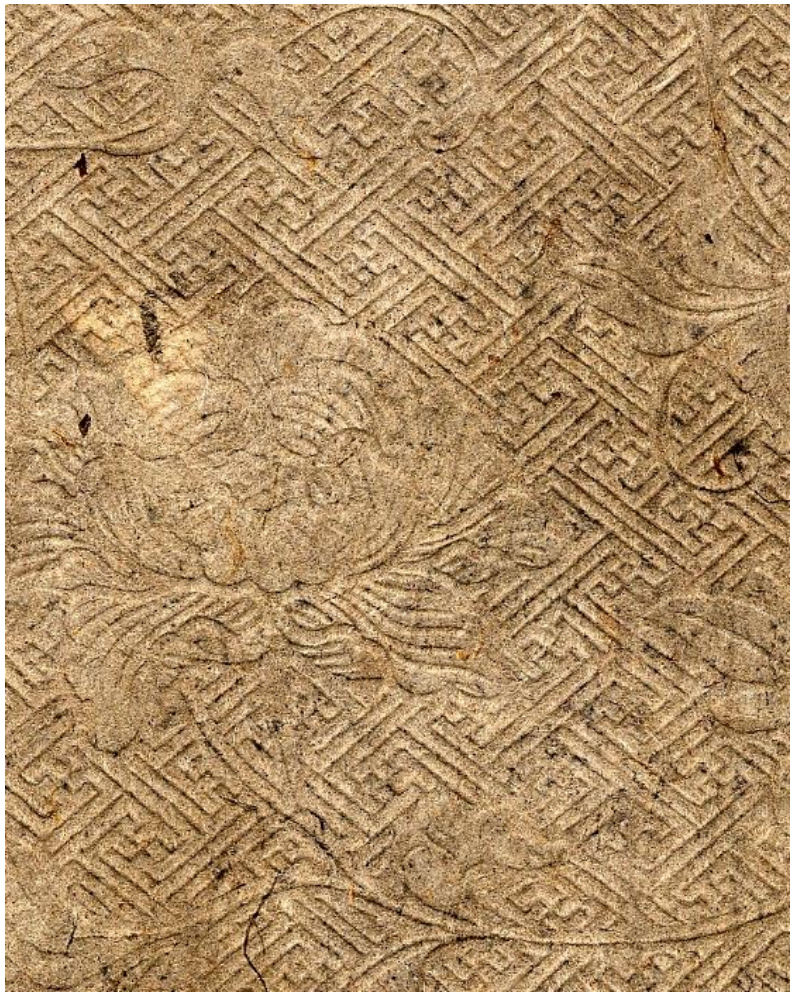


文政7年刊『十六夜日記残月抄』タ5-110-1-3
https://doi.org/10.20730/200001913

②卍繋ぎ（まんじつなぎ）

卍の字をくずして連ねたような形。紗綾形（さやがた）とも呼ばれる。卍は仏菩薩の胸や手足等に現れた吉祥相。

例：卍繋ぎ地に牡丹（ぼたん）唐草



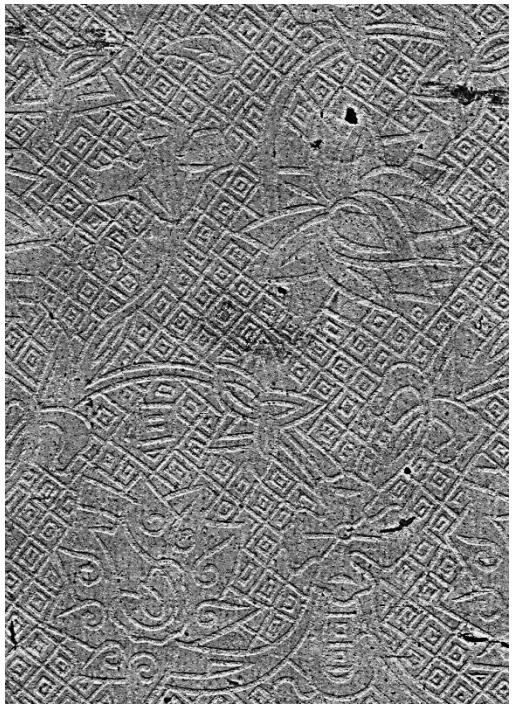
慶安5年刊『奥義抄』（表紙ウラ）サ2−14
おうぎしょう

とらや 干菓子「推古」
法隆寺の卍くずしを
かたどる

③雷文（らいもん）

稲妻形に屈折した線から成る。方形のうずまき状。

例：雷文繋ぎ地に蓮華唐草



明治期刊『青丘詩鈔』（表紙ウラ） ラ4−1
せいきゅうししょう

④麻の葉

例：麻の葉地に小菊と若松の丸散らし

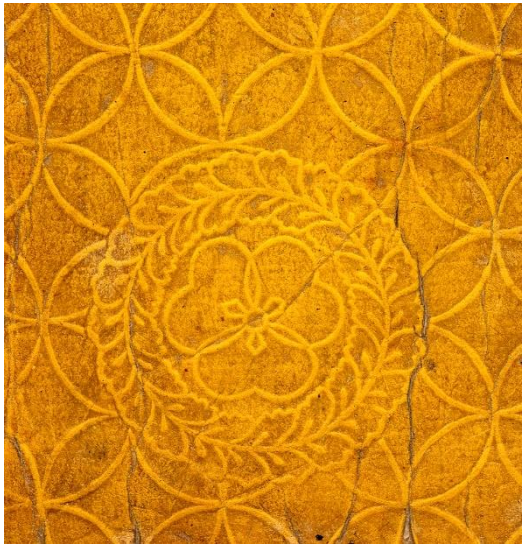
江戸後期刊『頭書鴨長明方丈記』
89−344（高乗家）

例：雷文襷地に雨竜

寛永無刊記『徒然草』（表紙ウラ） タ5−32

⑤七宝繋ぎ（しっぽうつなぎ）

例：七宝繋ぎ地に藤輪に片喰（かたばみ）文



文久3年刊

『江戸大節用海内蔵』
えどだいせつようかいだいぐら

マ3−39

https://doi.org/10.20730/200004490

⑥菱（ひし）

例：布目（ぬのめ）地に花菱　※布目地も多用される文様

嘉永元年序・刊『偏類六書通』
へんるいりくしょつう

マ3−52

例：松皮菱

江戸後期刊『枕詞燭明抄』
まくらことばしょくみょうしょう

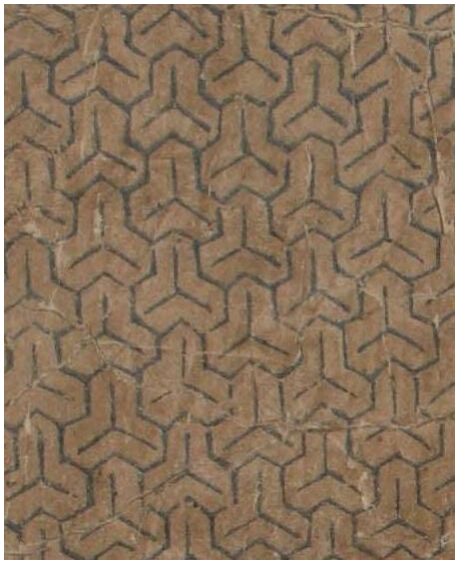
ナ2−289（表紙ウラ）

⑦亀甲（きっこう）

例：花文二重亀甲繋ぎに竜

宝永7年刊『二人びくに』
ナ4−409

例：毘沙門亀甲（びしゃもんきっこう）



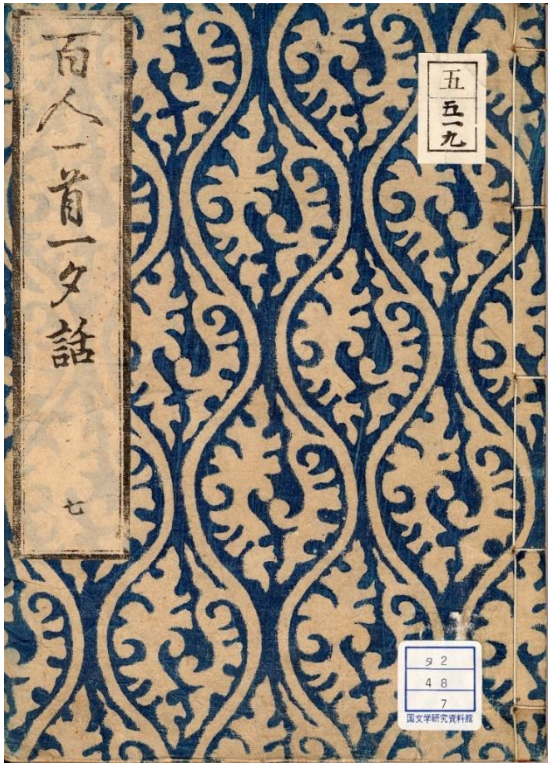
『天林山笠覆寺観音縁起』
てんりんさんりゅうふくじかんのんえんぎ
MX−355−44
https://doi.org/10.20730/200018616

東京都武蔵野市のマンホール
（日本マンホール蓋学会HP）

⑧立涌（たてわく・たちわく）

雲がわき起こるさまをかたどった吉祥文。

例：雲立涌



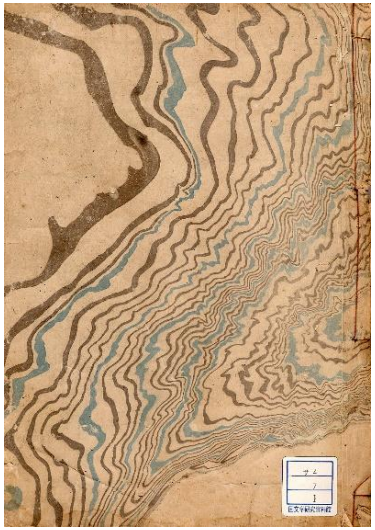
天保4年刊『百人一首一夕話』タ2−48

https://www.doi.org/10.20730/200000999

慶應義塾大学蔵『酒呑童子』

http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-70-3-1

⑨墨流し



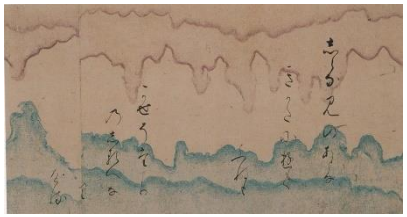
天明4年刊『竹取物語抄』サ4−7

https://www.doi.org/10.20730/200001896

⑩打曇り（うちぐもり）

文明9年写『古今集注』サ2−20

https://doi.org/10.20730/200005704



国立歴史民俗博物館蔵

『古今集恋歌散し書』

『うたのちから−和歌の時代史−』

2005年

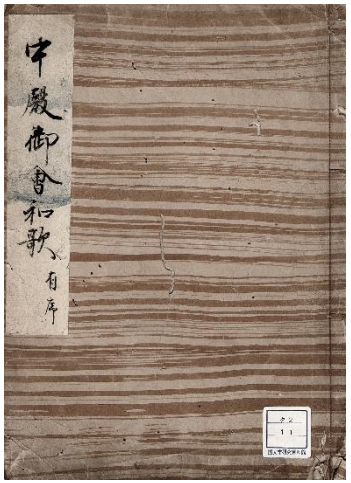
慶應義塾大学蔵『酒呑童子』
http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-70-3-1

⑧立涌（たてわく・たちわく）

慶應義塾大学蔵『ぶんせう』
http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/110x-445-3-3

⑪刷毛目（はけめ）

例：横刷毛目

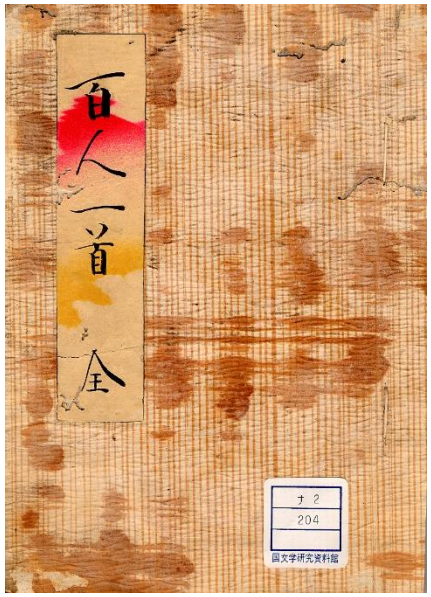


江戸後期写『中殿御会和歌』タ2−11
ちゅうでんぎょかいわか
https://doi.org/10.20730/200001948

例：格子刷毛目

近代写『うつほ物語俊蔭巻』
12−446（初雁文庫）
https://doi.org/10.20730/200003341

例：横刷毛目（渋引）

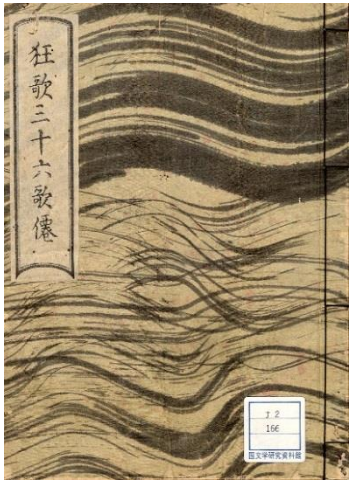


江戸後期『百人一首』
ナ2−204

例：斜刷毛目

天保14年刊『武器袖鏡』ラ8−14
https://doi.org/10.20730/200000845

例：波刷毛目



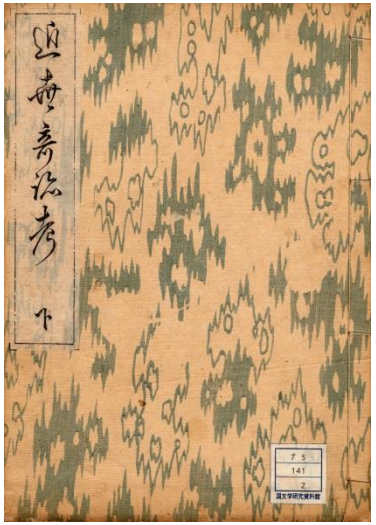
文政5年刊『狂歌三十六歌遷』
ナ2−166
https://doi.org/10.20730/200002692

自然・動植物文様

①雲文

例：雲中に鶴

例：朽木（くちき）雲



幕末明治期刊『近世奇跡考』
ナ5−141
https://doi.org/10.20730/200008259

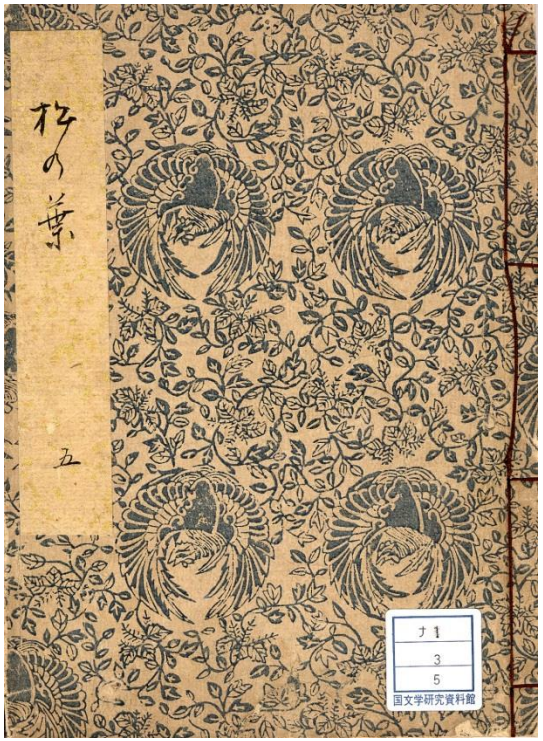
天保14年刊『古今和歌六帖標注』
サ2−1
https://doi.org/10.20730/200001777

明治15年刊『倭訓栞』マ3−34
わくんのしおり

朽ち木型の几帳（きちょう）『源氏物語絵巻』「早蕨」
https://www.tokugawa-art-museum.jp/exhibits/planned/2018/1103-1toku/

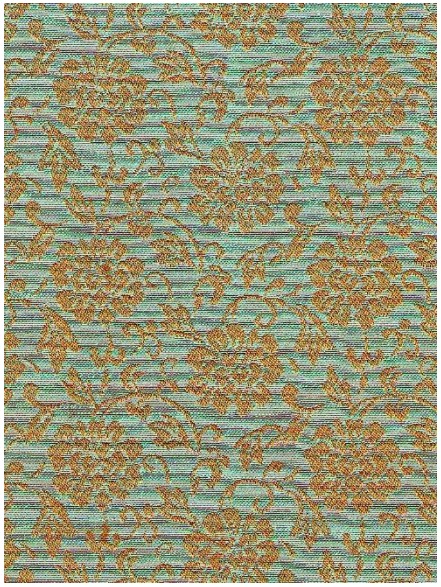
②唐草

例：桐唐草と鳳凰の丸　※古来、鳳凰は桐に棲むとされる



元禄16年刊『松の葉』ナ1−3
https://doi.org/10.20730/200002600

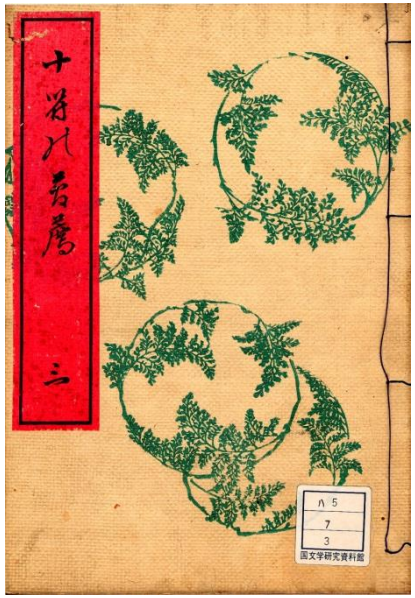
例：牡丹（ぼたん）唐草



江戸中期写
『住吉物語』（帙）
タ4−33
https://doi.org/10.20730/200003820

③信夫（しのぶ）

例：布目地に信夫の丸散らし



明治9年刊『十符の菅薦』ハ5−7
じっぷのすがこも

④葵（あおい）

例：布目地に二葉葵散らし

文化5年刊『月詣和歌集』12－331

つきもうで

https://doi.org/10.20730/200000291

例：小葵（こあおい）

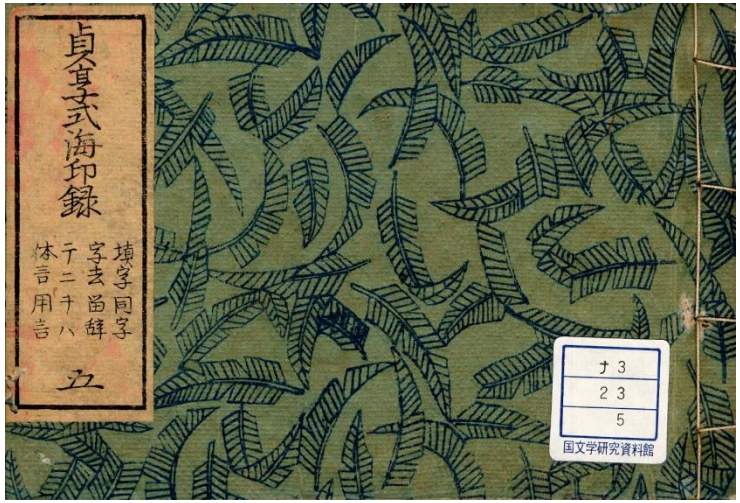
元禄6年刊『伊勢物語絵抄』

12－416

https://doi.org/10.20730/200003307

⑤芭蕉

例：芭蕉葉散らし



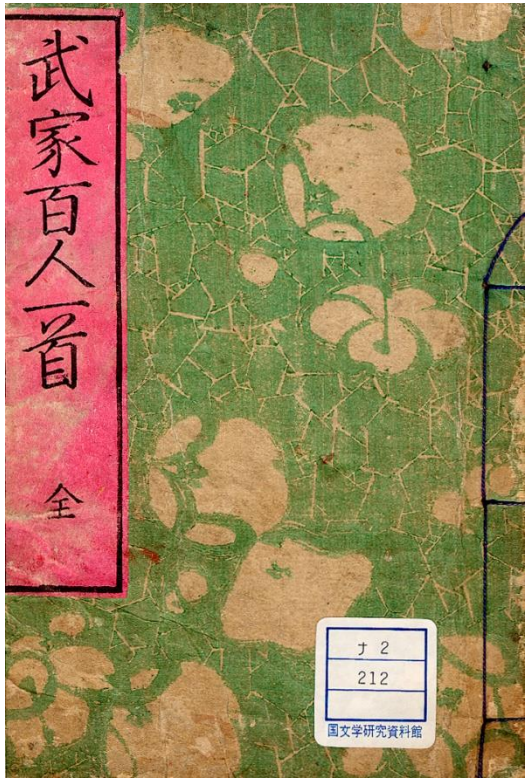
安政6年序・刊『貞享式海印録』ナ3－23

じょうきょうしきかいいんろく

https://doi.org/10.20730/200002565

⑥梅

例：氷割れに梅花



『武家百人一首』

ナ2－212

https://doi.org/10.20730/200006058

Ⅳ 文様レッスン①

繋ぎに

『仙洞御添削百首』ナ2−261
https://doi.org/10.20730/200001781

Ⅳ 文様レッスン①

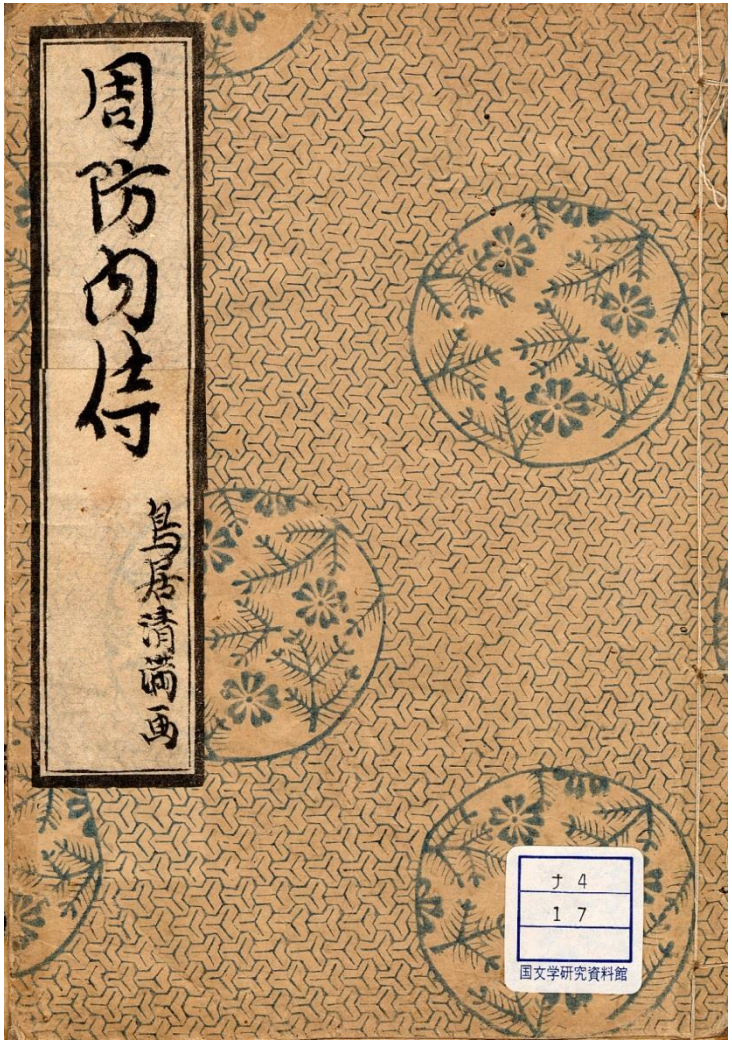
雷文

繋ぎに

桐唐草

『仙洞御添削百首』ナ2−261
https://doi.org/10.20730/200001781

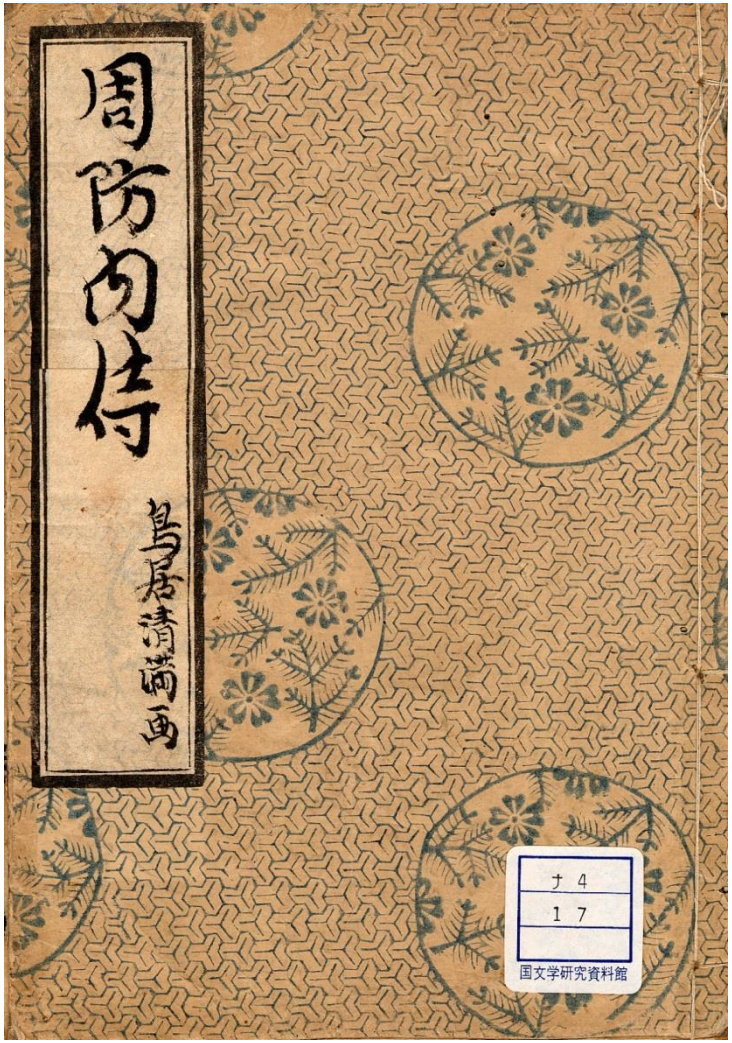
Ⅳ 文様レッスン②



地に　と　散らし

江戸後期刊『周防内侍』ナ4−17
https://doi.org/10.20730/200005566

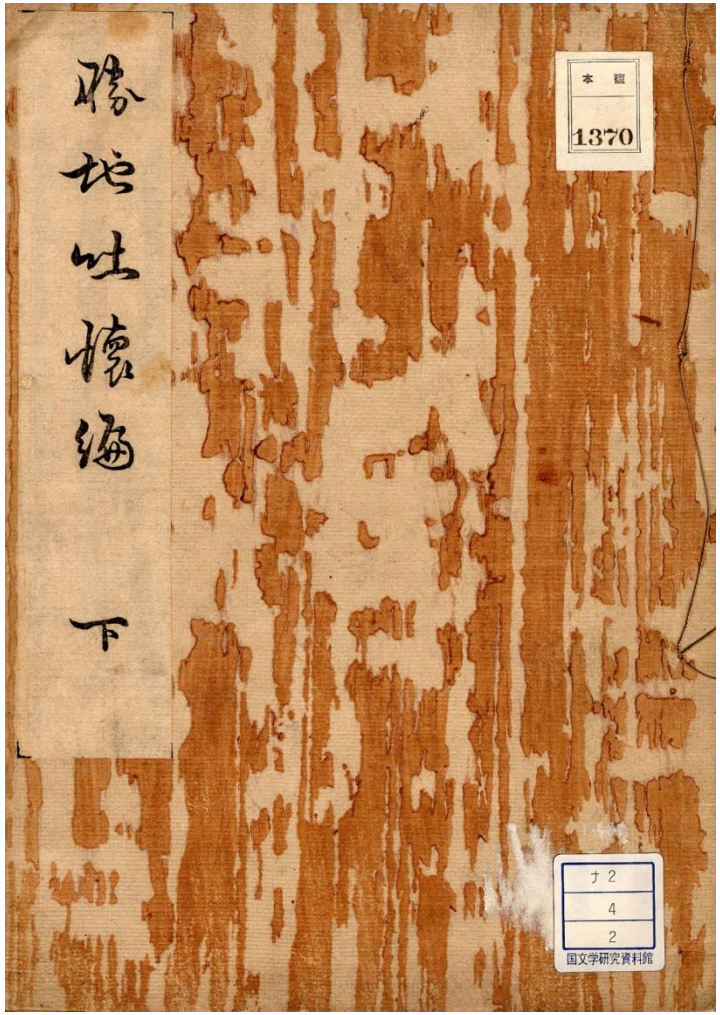
Ⅳ 文様レッスン②



毘沙門亀甲地に　桜　と　若松の丸　散らし

江戸後期刊『周防内侍』ナ4−17
https://doi.org/10.20730/200005566

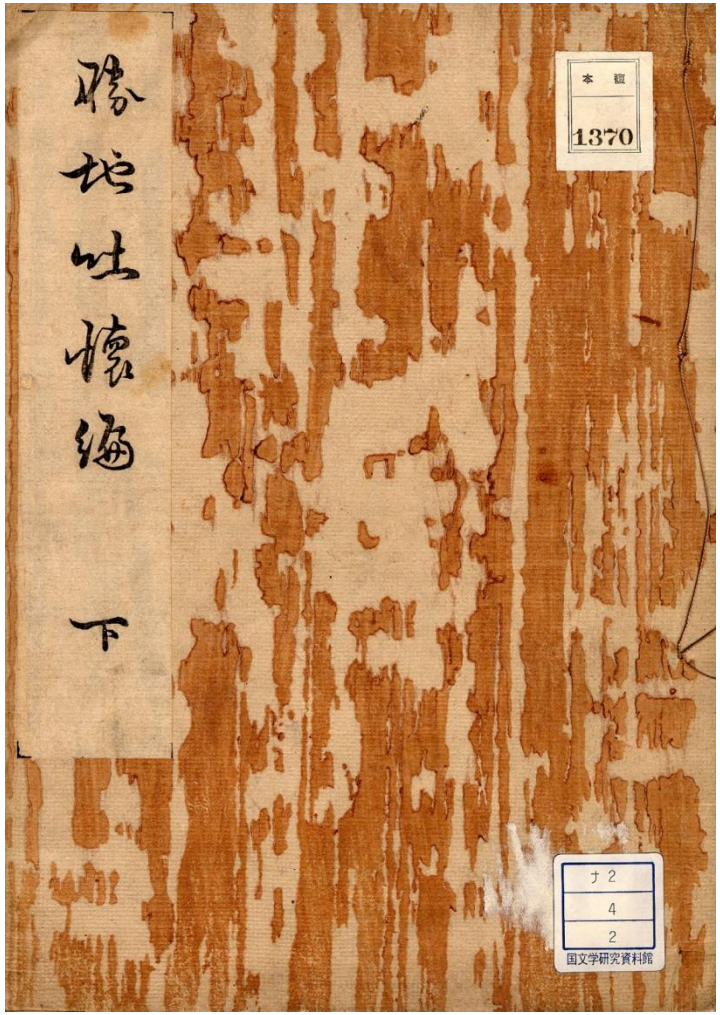
Ⅳ 文様レッスン③



寛政４年刊『勝地吐懐編』ナ2−4
https://doi.org/10.20730/200002607

目（引）

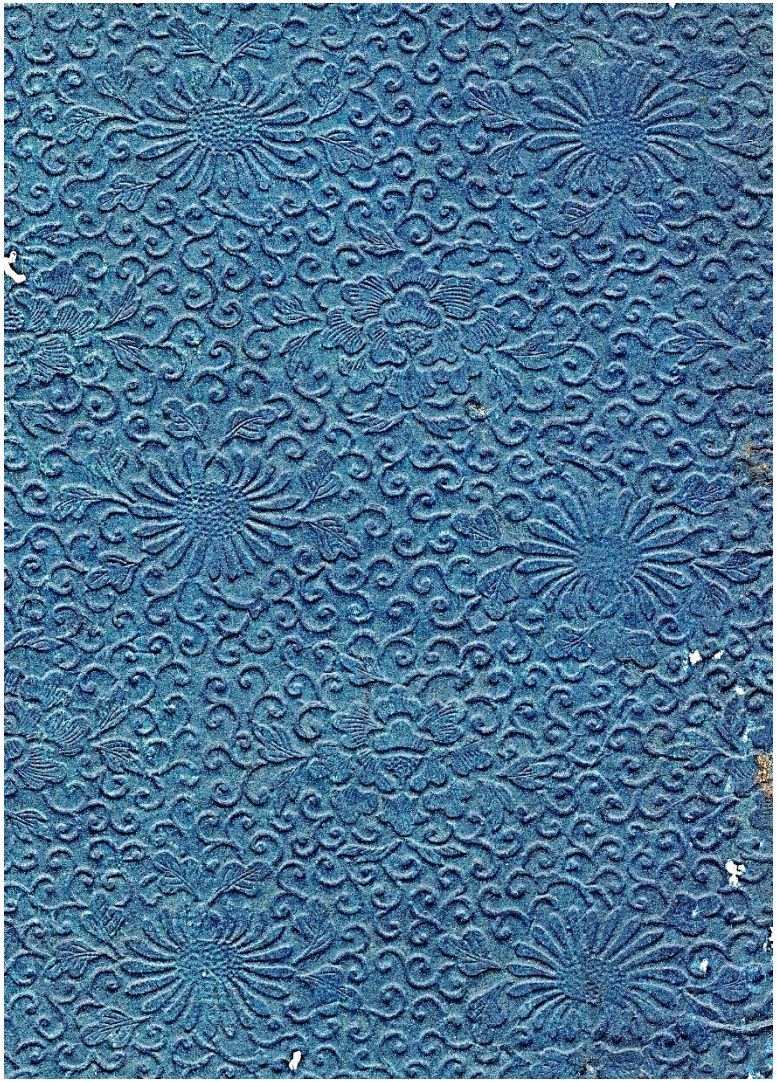
Ⅳ 文様レッスン③



寛政４年刊『勝地吐懐編』ナ2−4
https://doi.org/10.20730/200002607

縦刷毛目（渋引）

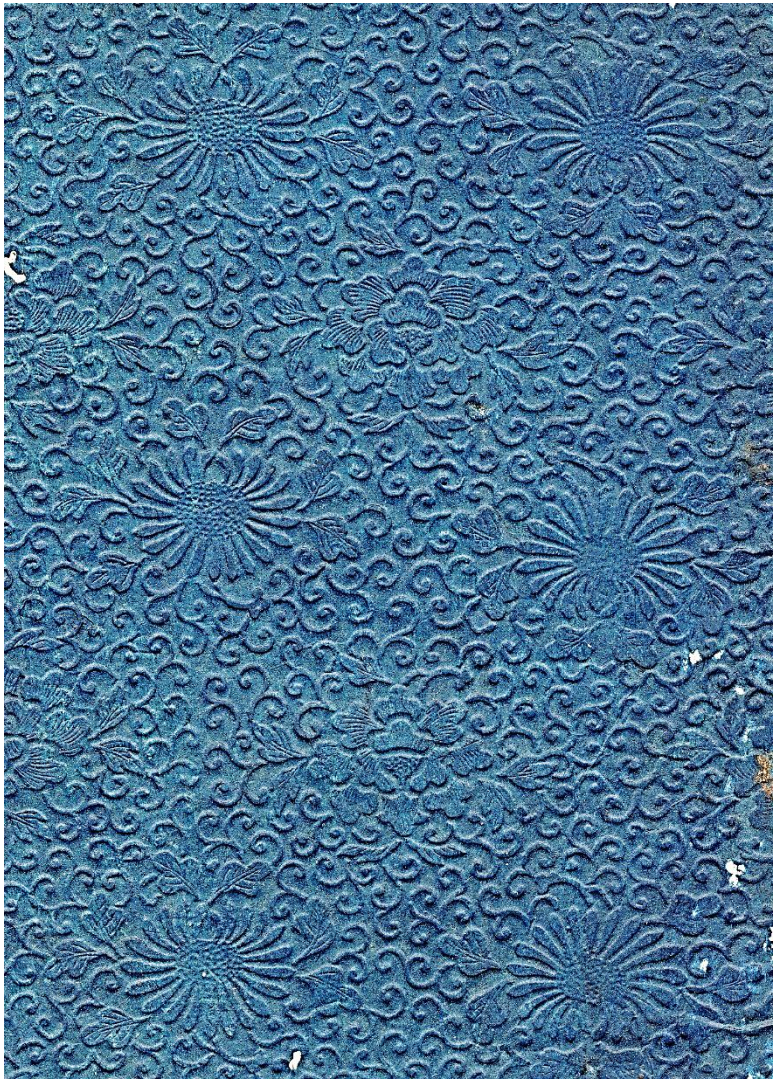
Ⅳ 文様レッスン④



『国本論』
96-631

唐草

Ⅳ 文様レッスン④



『国本論』
96-631

菊牡丹

唐草

Ⅳ 文様レッスン⑤

安永７年刊『奥細道菅薦抄』ナ３－１１９
https://doi.org/10.20730/200009667

Ⅳ 文様レッスン⑤

信夫散らし

安永７年刊『奥細道菅薦抄』ナ３－１１９
https://doi.org/10.20730/200009667

Ⅳ 文様レッスン⑥

（部分拡大）

『松屋叢考』ヤ9−122

地に

Ⅳ 文様レッスン⑥

（部分拡大）

『松屋叢考』ヤ9−122

布目

地に　若松

参考文献

・『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999年

・国文研文献資料部『調査研究報告』25号別冊『表紙文様集成』
（中野真麻理・小川剛生編、2004年。国文研HPからも公開中）

・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006年

・『日本の伝統色』大日本インキ化学

・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研の学術情報リポジトリに掲載
file:///C:/Users/m.saito/Downloads/EXB5002.pdf

・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968年

ご静聴ありがとうございました

国文研蔵『光琳画譜』より